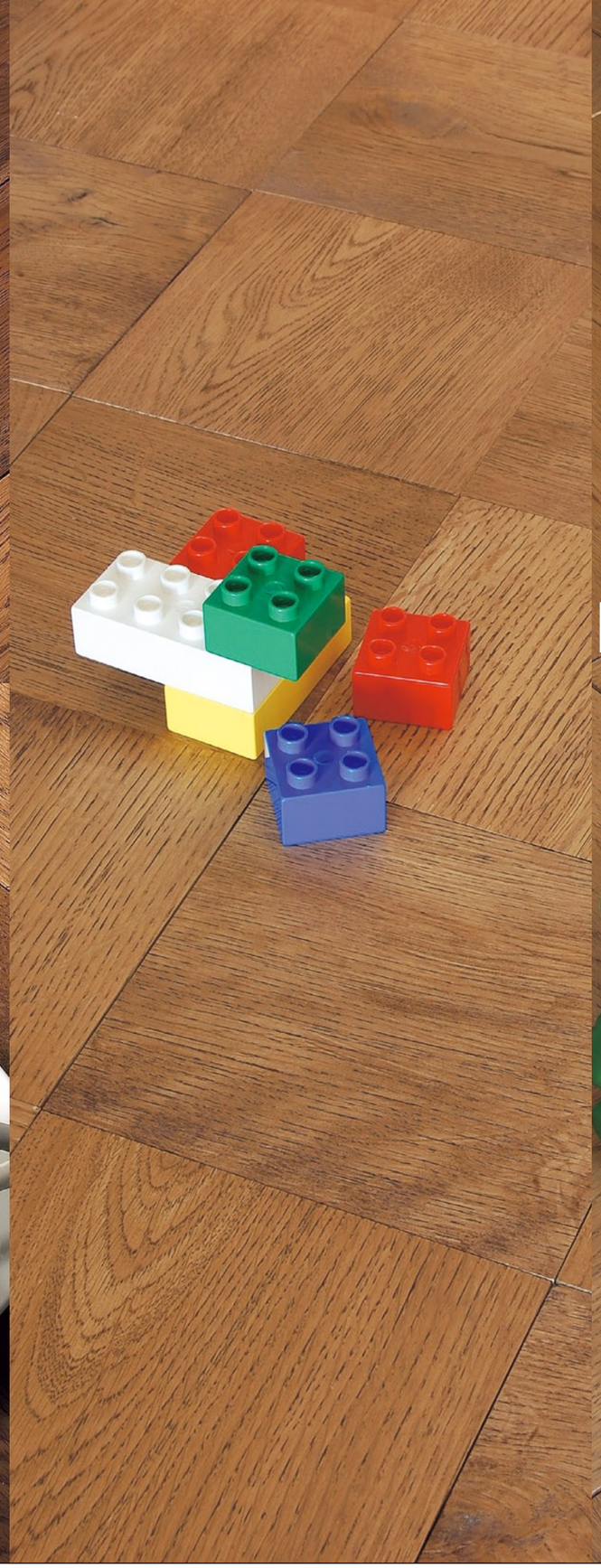
床。

お気に入りの家具やカーテンを
選ぶ、その前に考えたい



**1日のうち最も多く肌に触れ、
1日のうち最も多く目に入る「床」。
フローリングは素材、色、仕上げ、張り方次第で、
その感触、印象は大きく変わります。
最後に何気なく決めてしまいがちな「床」こそが、
空間の意匠を決める重要な要素であることに
お気づきですか？**

文／森廣 広絵

新築を思い立たせたのは、おおらかで温かな「床」

わが家の息子は、起きている間は飛び跳ねては悪戯を繰り返す、やんちゃ盛りの3歳児。元気なのは良いけれど、階下に響く物音が気がかりで、ついつい小言が多くなる。そろそろ、新築を真剣に考える時期になってきたのかな。

そんなことを漠然と考えるようになった矢先、いつも息子と出掛ける公園のママ友達が新築したという。最近、そういえば見かけないなぁと思ったら、家づくりで何かと忙しかったらしい。「ようやく引越しも終わって、落ち着いたから、帰りに寄って」。久々に会った彼女は、嬉しそうにそういった。

公園からほど近い住宅街の一角に建つ新居は、木造2階建て。木の香りが漂う家の中には、旧居で見慣れた家具が並んでいた。しかし、それらは生活の痕跡を残しながらも、新居にしっくりと馴染んで、あつらえたようにも見えた。普通の新築と何が違うのだろう。「限られた予算だったけど、わがままを言って床だけはね、無垢材のフローリングにしたの。床にはこだわっちゃった」と、彼女は笑った。なるほど、無垢材の床が肌に馴染んだジーンズにも似た居心地のよい空間に仕立て上げていたのだ。しかも、足に伝わる感触が温かく、心地よい。

ほんのりと白くペイントが施されているのも、ナチュラルな雰囲気を大切にする彼女らしい。「オスモっていう、子どもにも優しい塗料を使っているの。表面が人工的にピカピカ、テカテカしていなくて、『木』そのものの自然の風合いが、そのまま楽しめるところが気に入ったの」。

彼女の満足げな笑顔を見ていたら、まだ先の目標だと思っていた新築が、にわかに現実みを帯びてきた。毎日、息子がいくら走って跳ねても、こんな床ならば頼もしく受け止めてくれるはず。息子が幼稚園に通い始めるまでには、わが家もおおらかな床を主役にした住まいをカタチにしよう。

「ねぇ、ところで、このフローリングは何処で見つけたの？」